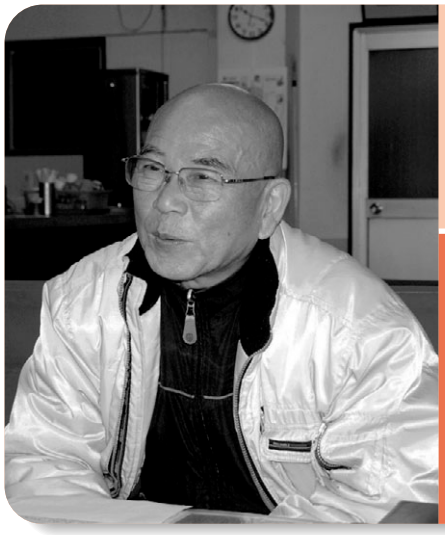

この人

本田 哲郎さん

フランシスコ会カトリック司祭
釜ヶ崎反失業連絡会共同代表

あらゆる差別が集中する釜ヶ崎で宗教の枠を超えて労働者支援に取り組む

布教活動はせず、労働者とともに闘う

日雇い労働者のまち、釜ヶ崎。人々がひっきりなしに行き交う通りに、「ふるさとの家」と白く染め抜かれたのれんが風に揺れている。この古い3階建てのビルがカトリック司祭、本田哲郎さんの“活動”の場所だ。

布教活動は一切しない。労働者たちの権利を守る活動をする釜ヶ崎反失業連絡会の共同代表を務め、デモや対行政闘争にも積極的に参加する。その姿は、聖書を片手にキリストの教えを説き、争いを戒める「神父様」のイメージからはほど遠い。しかし、本田さんは、「いや、そのイメージこそがキリスト教をゆがめてきたのです」と言い切る。

野宿する人のひと言で“よい子”から解放された

クリスチャンの多い奄美大島出身。「よきクリスチャンであれ」と育てられた。「要するに、“よい子”を目指すわけです。それは裏を返せば、人の顔色をうかがうということです」。その傾向をもったまま、神父になる。若くしてフランシスコ会日本管区の管区長に任命された時は誇らしさでいっぱいだった。しかし、心の隅には常に「見てくればかりを気にしている私は、人も自分も神をも欺いているのではないか」という葛藤があった。そんな自分から解放されたいと、祈りや自己検証をくりかえしするなど試行錯誤した。「けれど子どもの頃から身についた“よい子症候群”からはなかなか自由になれませんでした」

ある時、管区長として釜ヶ崎を訪れる。駅を一歩出ると、尿や腐った食べ物の臭いが漂っていた。通りのあちこちに汚れた布団や毛布が丸められており、寝ている人の長靴の先からは真っ黒な足の指がのぞいている。「そんな時にも、怖がってはならないと平静を装う“よい子”の自分がいました」と、本田さんは振り返る。

その夜、夜回りに参加することに。野宿者に配る毛布を積んだリヤカーを引いていると、路上で寝ている人がいた。通り過ぎたい気持ちを抑え、勇気を振りおこして声をかけた。起き上がったその人は、緊張しきった本田さんを見てニッコリ笑った。そして「にいちゃん、すまんなあ、おおきに」と言ってくれたのである。

その人の一番の望みに取り組むのが支援

「その瞬間に緊張感から解放され、とても気持ちが平静になったんです」。この一件を境に、不思議なほど“よい子”であることにとらわれなくなった。理由を知りたくて、東京の寄せ場・山谷で日雇い労働をした。明日の保障もない生活のなかで、まず他人を思いやる労働者の生き方に触れ、「人々に元気と歓びを与えるのは宗教者」と信じて疑わなかった自分と、愛という言葉ですべてをひとくくりにするキリスト教の傲慢に気づかされた。「誰よりも痛みや苦しみ、さびしさ、くやしさ、怒りを抱えている人たちこそ、聖書がいう“復活の力”をもっている。もやもやしていたものがようやくはっきりと見えてきたのです」。

釜ヶ崎に移り住んで20年。あらゆる差別が集中する現場を見てきた。「生活支援も大事ですが、もっとも重要なのは生活支援が必要でなくなる仕組みをつくること。炊き出しの列に並ばなくとも生きていける。それが釜ヶ崎の人たちの一番の望みです。その実現のために彼らに協力し、連帯して取り組むのが私のなすべきことなのです」。宗教者としての自分に厳しいまなざしを向けながら、本田さんの闘いは続く。